

誘
ゆう
拐
かく

ボッコちゃん

電話のベルが、待ちかねていた博士の前で鳴った。
彼は、それに手をのばした。受話器の奥の漆黒から、低い声が伝わってきた。

「もしもし、ご主人はおいでですか」

「ああ、わたしだが」

「有名なエストレラ博士に、まちがいありませんか」

「まちがいないが、いつたい、どなたです」

「それは申しあげられませんが、用件については、およそ、お察し下さったのではないでしょ
うかね」

声の終りは、冷たい笑いに變つた。

「あつ、ではおまえが……」

と博士は声をとぎらせた。相手は平然とした声。

「その通り。博士のお子さんは、ちゃんとここでおやすみになつていらっしゃいます」

博士は声をふるわせた。

「わたしの大切な子供を連れ去るとは、どういうつもりだ。まだ、生まれて一年にもならない子を……」

「そんなに大切なお子さんなら、自動車のなかにおいて、用たしなんかに行かないことです
な」

「あ、やはり、あの時につけ出したのか。ちょっと雑誌を買いに下りただけだつたのに。さては、前からねらつていたのだな」

「まあまあ、博士。じたばたしないで、科学者らしく現実を認めたらどうです」

「いつたい、なんで、そんなことをしたのか。わたしにうらみでもあるなら、わたしに対し
て行なつたらどうなのだ。卑怯な……」

「いや、わたしには博士へのうらみなどありません。むしろ、尊敬しているぐらいです」

「では、どういうつもりなんだ。妻も悲しみのあまり、ねこんでしまつた」

この時、相手の声は気がかりらしい響きをおびた。

「まさか博士、警察に届けたのではないでしょうね」

「いや、まだ届けてはない。万一の場合を考え、もうしばらく電話のかかるのを待つこと
にしていたところだ。だから、子供だけは傷つけないでくれ」

「さすがは博士、それだけお話をわかれば、ご心配はおかげしません。お子さんのことは大
丈夫。では、さつそく取引きにうつりましょう」

「取引きだと。しかし、子供をさらつて金を要求する罪の重いことは、知つての上だろくな」

「それは知つての上ですよ。だが、へんなことをなさつたら、お子さんがどうなつても知りませんぜ」

「ま、まつてくれ。いくら欲しいんだ」

「さつくばらんに申しましよう。博士が完成されて秘密にしておられるといううわさの、ロボットの設計図」

「えつ。いや、それは困る」

「お困りになるのは、勝手ですがね」

「あれは、わたしが世の悪をこらすために作ったものだ。おまえのような者の手に、渡すわけにはゆかぬ。額は望み通りにするから、なんとか金ですましてくれ」

「でも、博士がいつもおつしやるよう、研究は金で買えませんのでね。それに、その設計図を金にするのは、きっと、わたしのほうが博士よりうまいでしようよ」

「ああ、なんというやつだ。おまえは、それでも人間か」

「その通り。ロボットでない証拠には、ちゃんとこの通り欲があります」

「おまえのようなやつは、生かしておけぬ」

「どうか、興奮なさらぬよう。お子さんをおあずかりしていることを、お忘れなく」

「うむ、やむを得ない。取引きに応じよう」

「そうですよ。それでこそ賢明な博士です」

「しかし、わたしの坊やは、たしかにおまえのところにいるのだな」

「そのことは、ご心配なく。そばの長椅子の上で、さつきからずつと、おとなしくおやすみですよ」

「そうか、それでほつとした。しかし、念のために声を聞かせてくれ」

「まだ、なにもしゃべれないでしよう」

「いや、泣き声でいいのだ。泣き声さえ聞かせてくれれば、わたしも安心して取引きに応じよう」

「いいんですかい、泣かせてても」

「わたしは坊やの無事なことを、たしかめたいのだ。ひとつ耳を引っ張ってみてくれ。坊やはどういうわけか、耳の神経が敏感で、おとなしく寝ている時でも、耳を引っ張ればすぐに泣き出す」

「変な癖ですね。まあいいでしよう。やつてあげましょ。だけど、泣き声を聞きつけて、ひとが来るとうるさい。窓をしめきつてからにしますぜ」

「それは勝手だ。気になるなら、ドアにもカギをかけておいていい」

「なんですって」

「なんでもいい。早く泣き声を聞かせてくれ。無事な証拠を示してくれ」「お待ちなさい。いま、やつてあげます。それがすんだら、取引きの方法に移りましょう」相手の声はしばらくとぎれ、窓をしめているらしい音がした。そして、小さな声が聞こえた。

「坊や、おとうさんが泣き声を聞きたいとき。痛くとも、ちょっとがまんしな」博士は受話器を耳に押しつける手に力を加えて待った。はげしい爆発音が響いてきた。受話器をもとにもどした博士は、うれしそうに笑った。

「耳が引き金になっていたとは、気がつくまい。悪人がまた一人へつた」

親善キッズ

「やれやれ、やつと着いた。まつたく長い旅だつたな」地球からの親善使節団の一一行の乗りくだ宇宙船は、広大な空間の旅を終えて、銀色にきらめきながら、チル惑星の首都ちかくの空港に降りたつた。

「いいか、大気の検査がすみしだい、ドアをあける。翻訳機の点検を、もう一度やつておけ。おりものの箱は、こわれなかつたろうな。おい、ひげはそつたか。服にブラシをかけ、身だしなみをきちんととしておけ。われわれは地球の代表なんだ、恥をかかないように、気をつけるんだぞ」

団長は、そわそわしながら注意を与えた。言われるまでもなく、団員たちは鏡にむかってクシやブラシを動かしていた。

身づくろいをすばやく終えた要領のいい一人の団員は、双眼鏡を手にして窓から外を眺めていたが、それを目からはなして、団長に話しかけた。

「なるほど、町も人びとも、地球とほとんど同じですね。もつとも、男も女もショートスカートというところが珍しいが、これだつてスコットランドにはそんな習慣もある。しかし、